

TNBだより



令和7年2月号

令和6年度もあと1か月余りとなりました。この1年、先生方の熱心な指導や子どもたちの意欲を引き出すすばらしい授業をたくさん拝見してきました。日々努力を積み重ねておられます先生方に、改めて敬意を表します。

一方、文部科学省の調査では、小学生、とりわけ低学年の問題行動や不登校の増加が顕著であることが示されました。全国各地でそうした状況があるようで、管内からも小学生の指導が難しいという声をお聞きしています。学校問題サポートチームも、問題要因の解明や先生方の支援にこれからも携わっていこうと考えております。学校支援でお役に立てそうなことがありましたら、管理職を通してお知らせください。



本年度末で校長職を退かれる方から3名の先生にお願いして、永年携わってこられた教職への思いを綴っていただきました。子どもたちの育成に貢献してこられた功労を讃えつつ、TNBだより2月号でお一人、3月号でお二人のメッセージをご紹介します。

将来にわたって学び続ける力を育てる

丹波篠山市立多紀小学校長 松笠勝也

校長職を退くにあたり、これまで先生方に伝え続けてきた授業づくりについての私の考えを述べて、教育に携わる全ての方々へのエールにしたいと思います。

学習の主体者意識を育む10のコツ

主体的・対話的で深い学びを実現するためには、児童が夢や目標を持ち、学ぶ楽しさや喜びを感じながら、将来にわたって学び続けていくことが重要です。日々の授業において、児童が学習の主体者意識を持って深く学ぶための10のコツを示します。

①教師の説明を短くする。

- ・児童に発言の時間を多く与えていると思っていても、録音してみると9割教師が発言している。教師の発言を5割にすると、児童は5割発言できる。

②教師がオウム返しをしない。

- ・児童同士が、他者の話を「固唾をのんで聴く」ために、教師が児童の発言の言い直しをしない。聞き取り不足があれば、児童が聞き返す。

③教師が「実は・・・」と言わない。

- ・「せっかく自分たちで新たな発見をしたのに、結局先生に取られてしまう」のではなく「自分たちで課題解決できた」という自信を持たせる。児童のことばでまとめる。無理に詰め込まれた知識は忘れがちだが、自ら発見した知識は修正や発展がきく。

④教師が一問一答で終わる発問はしない。

- ・短答の発問でなく、理由や根拠をもとに発言できる発問にする。慣れてくると常に理由をあげて説明することができるようになる。

⑤児童に聞き返しができるようにする。

- ・児童同士の聞き返しは、学ぶ意欲を高め、発言者の責任意識を醸成し、「聞き取る」意識が確実に生まれる。

⑥児童が「〇〇がわかりません」と言えるようにする。

- ・わからないことをわからないということで、認められ自己効力感が生まれ、尋ねられている側もわかるように説明することでより理解が深まる。

⑦児童の「学び方」「学びのプロセス」をほめる。

- ・児童の根拠を明らかにした発言や人とつなげて発言するなど「学び方、表現の仕方」に視点を当ててほめ、学級の文化とする。

⑧今の学びが将来につながることを示す。

- ・学習内容及び学び方が、何につながるかを場面に応じて知らせる。

⑨課題解決の根拠となる資料を児童に用意させる。

- ・情報を見いだす能力育成のため、必要感を持って必要な資料を用意させる。

⑩児童を学び続ける崇高な存在と見る。

- ・児童は何もできない存在ではなく、「こんなこともできた」「あんなこともできた」という可能性を持った学び続けることのできる崇高な存在であるという認識を持つ。「ほめる」→「できる」という連鎖をつくる。



私語や立ち歩きが多く、寝転ぶ子どものいる学級もありました。4か月後に再度訪問すると、特性を感じる行動はあるものの、全員が座って担任の先生と目を合わせて学習課題に向かう集団に成長していました。担任の先生に心がけられたことをお尋ねすると、次の4点を話してくださいました。

- ・誉め言葉を多くしている。
- ・時々はっきり叱ることもある。
- ・子どもたちと一緒に活動する。できるだけ一緒に遊ぶ。
- ・今は子どもと一緒に楽しむような気持ちでいる。

この学級について、管理職の先生は「ストレス耐性という力は、がまんすることではなく、満たされることから生まれるのですね」と評されていました。

教師と子どもの関わりや学級について、何か大切な原点のようなものを教えられた訪問でした。

